# 元英国外交官チャ ルズ ル ガイ イ トン（6/6）

:

明:

哲学者/作家による真 の探求は、信仰と行 を 和させんがための恒常的な葛藤に まされました。第6部: いた を させること。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 著名人

より: ガイ イ トン

日05 Nov 2012

集日 05 Nov 2012

私には逃げ が必要でした。土地と恋に落ちる事が出来るというなら、私はジャマイカと恋に落ちましたが、ジャマイカではないという理由だけで、私はエジプトが大嫌いでした。そこには青い山々、 の海、そして西インド の美しい女性たちは 当たりませんでした。私は故 と感じることの出来た唯一の 所から、なぜ去ってしまったのでしょうか? しかしそれだけではありませんでした。私が残してきたのは土地だけでなく、その人物を きにして人生は空虚で生きる意味のない、一人の若い女性でした。そのとき、私は 迫 念という言 が意味するものを初めて悟りました。それは苦痛を伴うレッスンでしたが、自分自身、そして他人について理解しようとする者にとっては良いレッスンでもありました。それ以前の私の人生には何の もありませんでした。 として、それは昼夜を通して私の思考を占め、 の中まで れて来る人物への欲求でした。 中、私は学生たちの前で恋 を み、 すると、彼らはこう言ったのです。「英国人に心があるとは。私たちは皆、英国人は のように冷たいと思っていたのに。」

これらの学生たちは、5 6人の上 生グル プでしたが、彼らも私にとっての逃げ でした。私の居たかった 所から8,000マイルも れていたことを理由にエジプトは嫌いでしたが、この青年たちは心から していました。彼らの暖かさ、素直さ、そして彼らが知りたか

ったことについて私の教えを信用してくれたことは、とても嬉しいことでした。彼らは善きムスリムであったため、私は彼らの信仰も すようになりました。もはや私には疑念がありませんでした。もし私が一つの宗教に打ち み、そこに自らを 禁することが可能なのであれば、それはイスラ ム以外に考えられませんでした。ただ、私にはそのが出来ていませんでした。 アウグスティヌスの祈りが の中をよぎりました。「主よ、私を　にしてください。ただし、今ではなく。」海のような 大な余暇を持て余す若者たちは、　さ、敬虔さ、またはより良い人生について祈りますが、同じような保留の 度を示すのです。そして彼らの多くは同じ状 で死に むのです。

正直に言うと、私は自らの 躇に打ち てなかったかも知れません。将来的にイスラ ムを受け入れようと意 してはいましたが、 定行 を何年も延期し、年を取っても「まだだ」と言い けていたのかも知れません。ジャマイカへの 着心と、あの人物への想いは、月日を重ねても消えるどころかますます大きくなっていきました。ある朝、私は目 めると、あの へ ることを阻むのは、金 面だけであると 信したのです。 い合わせると、蒸 船のデッキであれば、70ポンドで旅立つことが出来ることを知りました。大学の学期 までにはその金 を蓄えることが出来ることは分かっていたので、私の人生は再び 化しました。脱出が近いことを 信したので、私は意外にもカイロを しむことが出来るようになりました。しかし、一つの　がはっきりとした答えを要求しており、その答えを 延することはそれ以上不可能でした。イスラ ムへ改宗する 会は、次はないかも知れなかったのです。私の正面には いた扉がありました。もしそこに踏み入れなければ、その扉は永久に じるかも知れなかったのです。しかし、私はジャマイカでどのような生活をするか知っていましたし、そうした 境でムスリムとして生きて行く 意が私にあるかどうか分かりませんでした。

私はムスリム同胞だけでなく、大半の人々が 愕するような 断を下しました。私は、取り敢えずはイスラ ムを受け入れ、自分の心のなかに「 を撒き」、それがやがては健康な木として育つことに希望を すという 心をしたのです。私には何も言い はありませんし、 かがそれは不　、または虚 の意 であると言いがかりをつけてきても、その人物を めることは出来ません。しかしそのような人物は、神にはいつでも人の弱さをお赦しになる　があること、そして不毛な地から の芽を出し、それを らせることの出来る御力が

あることを くびっているのではないでしょうか。いずれにせよ、私にはある の 制力がいており、私はそれに しなければならなかったのです。私はマ ティン リングスの元へ行き、一 に をぶちまけ、彼に「シャハ ダ」の 人、つまり信仰宣言に立ちあって欲しいと んだのです。彼は最初は 躇していましたが、 いを いてくれました。恐怖で一杯ではありましたが、ある の喜びを感じつつ、人生で始めての礼 をしました。翌日、そのときはラマダ ンだったので、私は自分がそうすることなど出来っこないと め付けていた断食をしました。それから私は上 生の生徒たちに成り行きを知らせ、彼らは暖かい 迎をしてくれました。それまでも、私たちは しい仲だと思っていたのですが、 には私たちの には障壁があったことに 付いたのです。その障壁はなくなり、私は彼らの真の兄弟として められたのです。私の密かな旅立ち（学部 には私が去ることを えていませんでした）までは6 が残っており、彼らの一人が 日、私にクルア ンを教えにやって来ました。私は の中の自分に目を凝らしました。 は同じでしたが、それはまるで 人が被っているマスクのようでした。私はムスリムになったのです。依然、 した状 で私はアレキサンドリアの船に り み、未知の未来へと出航しました。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/164

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。